

3. 地下水位等一斉観測

3.1 調査目的

一斉観測は市内全域の地下水位等を1～2日間で一斉に測定し、得られた地下水位から地下水面の高低を推定し、地下水の流れる方向及び傾斜などを推定するものである。

3.2 調査方法

調査対象箇所は62箇所、地下水位の測定と水温、電気伝導度及びpHも揚水が可能な井戸について測定した。

調査は平成19年2月20,21日に実施し、得られた地下水位を標高に換算し、地下水位等高線に示した(図-3.1)。既存資料として、農林水産省関東農政局が平成2年度に実施した「農業用地下水調査、地下水かん養調査(松本盆地北部地区)」の調査結果の昭和61年2月17日の観測結果を合わせて示し、経年での変化の状況を比較した。また、電気伝導度を等値線で示し(図-3.2)、地下水流向の検討材料にした。

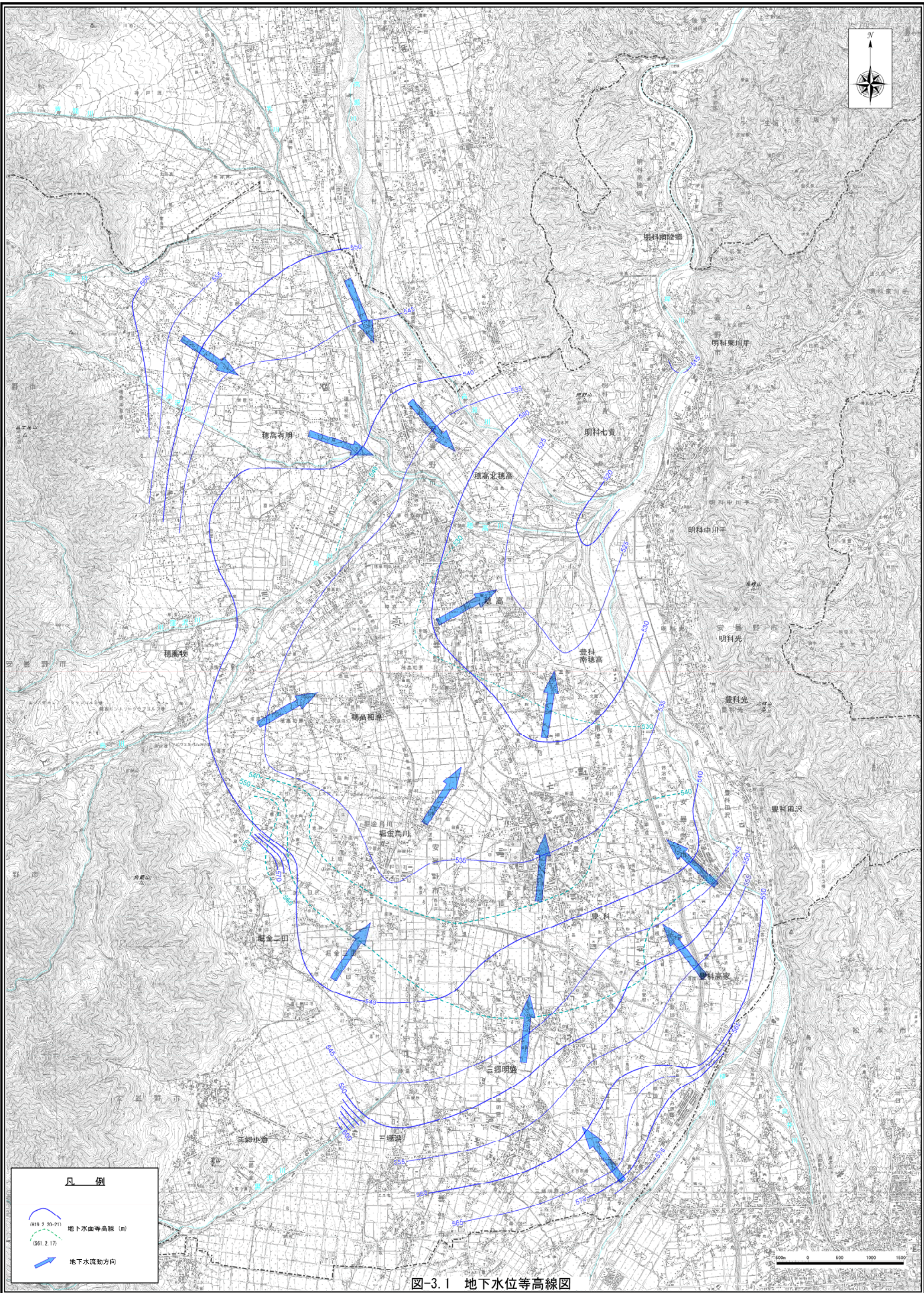
3.3 調査結果

3.3.1 地下水位等高線

- ① 地下水位等高線は、高瀬川、穂高川及び犀川が合流する湧水地帯を中心に、西側に広がる半同心円状を示し、湧水地帯に向かって周囲から地下水が集まっている状況を示している。
- ② 調査地西部の烏川扇状地付近では地下水位等高線の間隔が広くなり、地下水位の勾配が緩やかである。
- ③ 調査地全体での大きな地下水の流動方向に、経年での変化はほとんど認められない。

3.3.2 電気伝導度等値線

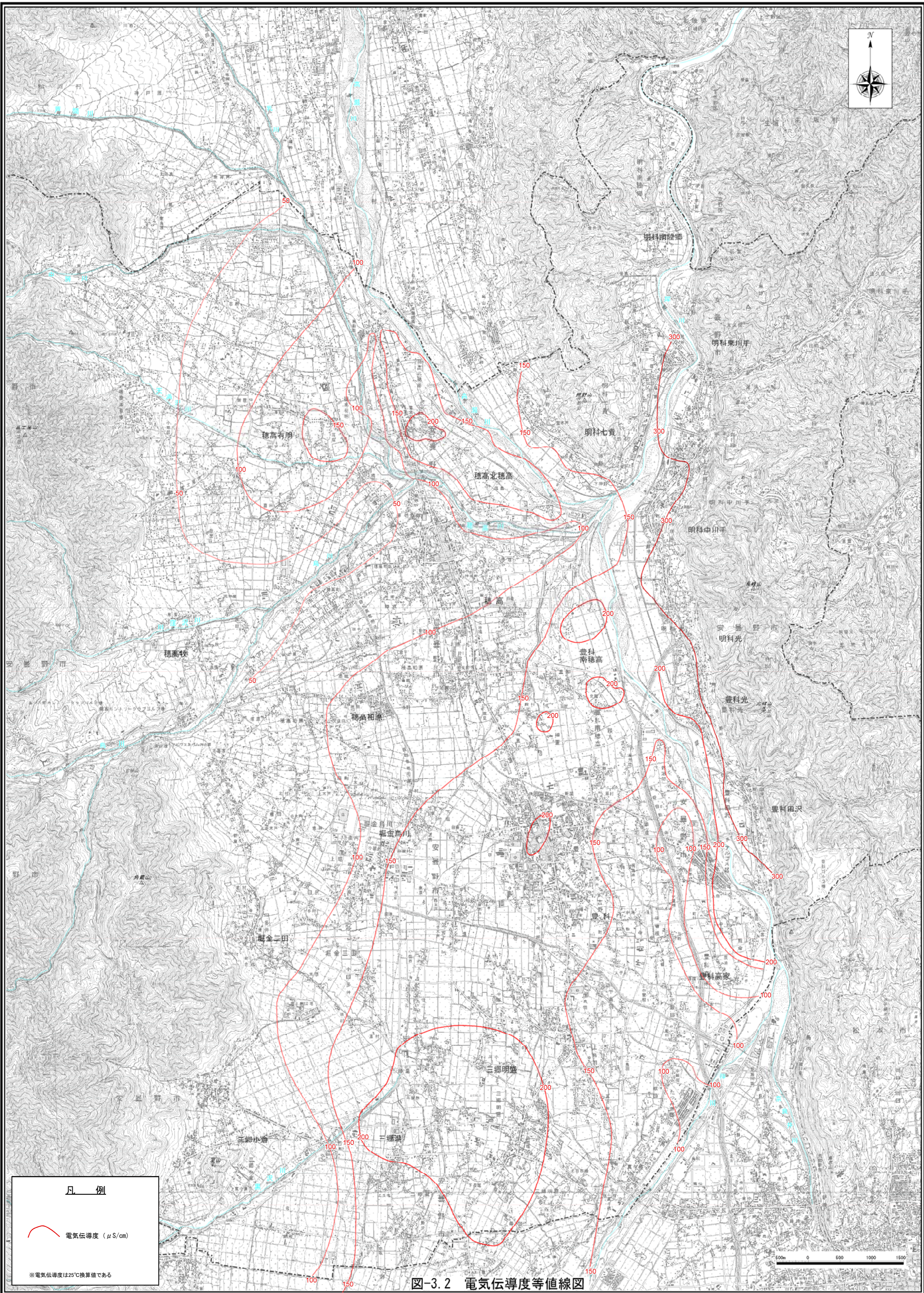
- ① 電気伝導度の低い地域は、調査地西部、烏川・中房川両岸及び梓川左岸で、地下水の涵養が推定される地域で相対的に低い傾向を示した。
- ② 一方、電気伝導度が高い地域は、調査地南西部及び東部の比較的広い範囲で見られる。また、三川合流地点の南方及び北西方向に、狭い範囲で分布が認められる。
- ③ 電気伝導度の等値線は、地下水の流動が推測される方向に延びる傾向である。




凡例

- (H19.2.20-21) 地下水面等高線 (m)
- (S61.2.17) 地下水流動方向

図-3.1 地下水位等高線図



凡 例

 電気伝導度 ($\mu\text{S}/\text{cm}$)

※電気伝導度は25℃換算値である

図-3.2 電気伝導度等値線図